

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	障害児通所支援事業 きぼうっこ逆瀬川		
○保護者評価実施期間	令和 7年 12月 20日	～	令和 8年 1月 23日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	26	(回答者数) 20
○従業者評価実施期間	令和 8年 1月 6日	～	令和 8年 1月 23日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	2	(回答者数) 2
○訪問先施設評価実施期間	令和 7年 12月 20日	～	令和 8年 1月 23日
○訪問先施設評価有効回答数	(対象者数)	18	(回答者数) 14
○事業者向け自己評価表作成日	令和 8年 1月 30日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・子どもの状況に合わせた適切な頻度を設定し、本人中心の訪問支援を実施している。	・月に1～2回の頻度で、訪問支援員が学校を訪問し、子どもの様子を観察している。 ・子どもを対象とした学校生活についてのアンケートを定期的 に実施し、学校肯定感と学校回避感についてモニターを行って いる。 ・学校回避感が強い子どもには、面談を行い、状況の確認を行 い、不安解消に努めている。	・引き続き、子どもを対象としたアンケートを実施し、実態 を知る。 ・子どもが将来の日常生活や社会生活を円滑に送れる力を育 めるように、周囲の理解や環境整備を通じて安定した学校生 活の実現を目指す。 ・子どもの意向や希望を尊重し、主体性、自己肯定感、「自 分で決める力」を育めるように丁寧な支援を行う。
2	・放課後等デイサービス(SST療育)で練習しているソーシャル スキルを日常生活に活かすために、学校や家庭と連携した支 援を実施している。	・訪問支援員が学校での子どもの様子を直接観察し、教員との 綿密な情報共有を行うことで、学校特有の課題を具体的に把握 することが可能となり、事業所の支援に取り入れることができ るようになった。 ・事業所と学校と家庭のそれぞれの場所での行動問題について 情報共有を行い、介入方法を一緒に考えることで共通理解が深 まった。	・事業所で練習しているソーシャルスキルが事業所外(学校 や家庭)でも活用できる場面を設定してもらい、子どもが事 業所で習得したソーシャルスキルを発揮する機会を増やすた め、学校や家庭との更なる連携を図る。
3	・放課後等デイサービスの療育で子どもの普段の様子をよく 知っている職員が訪問支援を行っている。学校場面で行動問 題を抽出し、事業所内のSSTプログラムで効果的な介入を実施 している。	・子ども一人ひとりの理解度や生活環境に応じた代替行動を設 定し、SSTプログラムに取り入れ、実践的な改善を促すことで 行動問題が減少し、適切な行動が定着するといった成果が得ら れている。	・事業所と学校との密な連携により、子どもの発達支援の効 果をより高めるための実践の蓄積を行っていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・利用希望者が多く、希望する全ての子どもへの支援が難し い。	・日程調整や書類作成等の事務作業に時間を要している。	・より多くの利用者に支援できるように、福祉DXを推進 し、事業所独自の訪問支援の体制を整える。
2	・訪問時の教員とのやり取りにばらつきがある。	・教員によって、希望する情報共有のレベルが異なる。	・事業所の保育所等訪問支援について、誰もが共通の認識を 持ち、理解が深まるようにマニュアルを作成する。
3	・訪問支援で専門的な支援を実施できる職員が少ない。	・実務経験を含めた専門性をもった訪問支援員の数が少ない。	・教員や保護者からの相談に適切に答えることができるよう に相談技術を身に付けられるように努める。 ・外部からのコンサルテーションを受け、専門性を高めてい く。